

〈2013年度長野大学研究助成金による研究報告〉

(準備研究)

家庭養護におけるケア提供者支援に関する研究

上鹿渡 和 宏*

Kazuhiro KAMIKADO

研究実績の概要

我が国の社会的養護は他国に比べて施設中心といわれてきたが、近年厚生労働省も家庭養護の推進という方向性を明確に示し、各自治体においても家庭養護委託率の向上に向けて様々な取り組みが始まり、福岡市や大分県などの成功例も紹介されるようになってきた。ただ、現場においては今後も増え続けていく家庭養護で提供されるケアの質の維持について心配する声もあがっている。

筆者は、平成24年度に助成を受けて実施した「乳幼児社会的養護におけるケア提供者（施設職員、里親等）トレーニングプログラム FAIR start project の国内での実践応用にむけての研究」の中で、日本での実践応用にあって不足していると思われた家庭養護におけるケア提供者への具体的な支援、プログラムについての調査研究が不可欠と考えるに至った。本研究は、内容としては家庭養護の先進国ともいえる英国で開発され10年以上にわたって取り組まれ、RCT で効果も実証されている里親トレーニング・支援プログラム（フォスタリングチェンジ・プログラム）についての独立した研究でもある。本研究とこれまで研究を続けてきたフェアスタート・プログラムとを合わせて、今後外部資金を獲得して現場での実践とその評価に向けた準備を進めることが本研究の目的であった。

計画としては1年間で、英国での本プログラム実施後の評価を確認しながら、プログラムの内容についてもすでに出版されている里親向けハンドブックや

ファシリテーター用マニュアルをもとに明らかにし、本プログラムの存在を日本国内の関係者に周知すべく、関連研修会での提示や学会での発表、ハンドブックの翻訳出版を予定した。これらについては当初予定に沿って、25年9月の世界里親支援機構 IFCO 大阪大会での分科会開催、児童青年精神医学会でのポスター発表、日本子ども虐待防止学会学術集会での報告、また、25年12月には里親用ハンドブックを翻訳出版する等確実に実施できた。その他にも研修会や講演会等依頼された際に、本研究成果について伝え現場の評価を確認したが、現場からは本プログラムについての詳細を知りたいという声や国内での実施を求める声が聞かれた。

また、26年3月には、当初の計画通り本プログラムを開発運営している英国モーズレイ病院の専門家チームを訪問し、日本でのプログラム実施とその後の評価、効果測定についての可能性や方法を確認した。また、日本での今後の展開について、オーストラリアやニュージーランド等、他国への紹介事例も参考に具体的に協議した。さらに、今後外部資金を得て実践・研究を進めるために必要なファシリテーター養成コース(5日間)にも参加し、このコースの日本での実施に向けた準備の第一歩を踏み出すことができた。

本研究は、日本の社会的養護体制における家庭的養護の推進の流れを踏まえて、現場に関わる児童精神医学、児童福祉学の研究者である筆者が、海外での先行事例をモデルとして、子どもの最善の利益の実現に向けた社会的養護体制の再構築と個々の現場

*社会福祉学部准教授

での実践を進めるための礎としての意義を持つ研究と考えられる。ところで、24年度に本学より研究助成を受けて研究を継続しているフェアスタート・プログラムについては、25年6月に北野生涯教育研究助成に応募し採用となり、26年6月の日本語版プログラム翻訳完成と公開に向けて着実に準備を進めているところである。実施準備を先行させてきたフェアスタート・プログラムを補う意味でも、今後さらに別の外部助成金を活用してフォスタリングチェンジ・プログラムの国内での実施を検討している。

当初想定した研究期間内の達成課題であったプログラムの詳細な内容、信頼性を文献や英国での現地調査を通して確認し、また、今後の展開のために様々な機会を利用して本プログラムについて関係者へも周知することができた。一方で、26年3月に渡英しファシリテーター用コースに参加し、さらに本プログラム開発責任者のロンドン大学キングスカレッジ精神医学研究所のスティーヴン・スコット教授や実際にプログラムを実施運用しているフォスタリングチェンジ・チームのソーシャルワーカーとの話し合いを通して、日本での本プログラム実施にあたってはいくつかの課題があることも明らかになった。外部助成金に応募しての本プログラム実施とその効果測定研究に向けて確実な準備をするために、26年度も引き続き長野大学研究助成金(準備研究)への応募を考えている。

前年度研究報告書でも述べたとおり、最終的には施設養護と家庭養護、両方の取り組みを提示しながら、子どもの置かれた状況に応じて、子どもにとって最善の利益が得られるような対応や支援を確立させるべく実践を展開していきたい。

研究発表

雑誌論文

1. 上鹿渡 和宏 『日本の社会的養護に必要なこと』を見つける方法について」IFCO 大阪世界大会記録集、2013年、pp. 288-289
2. 上鹿渡 和宏 「英国の里親支援プログラム Fostering Changes Programme について」日本児童青年精神医学会抄録集、2013年、p. 358
3. 上鹿渡 和宏 「施設から家庭養護へ移行した子どもの30年予後調査(池田1981年)から今後の家庭養護について考える」日本子ども虐待防止学会第19回学術集会抄録集、2013年、pp. 116-117

翻訳

上鹿渡 和宏 「子どもの問題行動への理解と対応 里親のためのフォスタリングチェンジ・ハンドブック」福村出版、2013年12月